

春の夕べ、創世記の響き

牧師 山本 護

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。〔光あれ〕。こうして、光があった(創世 1:1~3)」。

1798年、J.ハイドンの3部33曲からなるオラトリオ『天地創造』が初演されました。音「深淵の闇」という驚くべきエネルギーには関心が払われていません。



3月初旬、神話的な物語ではなく、音楽でもなく、「地の混沌」か「深淵の闇」かの創造エネルギーを直截に表すような公演が礼拝堂でおこなわれました。『O' Nancy in French with OVERHEADS』と題されたこのパフォーマンス、二人の演者が1980年代に試みていた行為の再演なのですが、「創造された私」が覚醒させられる興味深いものでした。

私たちは日本人であっても、琵琶楽や能楽が用いる自然音よりも西欧クラシック音楽が生み出した音律や楽

器に慣れ親しんでいます。ですからロックやジャズは楽しめても催馬楽は聴き通せない、という偏りの内にあります。日本の伝統音楽は雑音やサワリ音を多用しますが、「O' Nancy in French」の音響はそれを徹底し、統合できる楽音を廃しているかのようです。つまりクラシックやポピュラー音楽とは逆方向に純度を高めているため、狭められた私たちの感性基準を素通りして、「創造された私」に直結する。

「O' Nancy in French」の音響装置はメーカーが販売する楽器ではなく、米櫃とドラム缶。そこにコンタクトマイクを接触させて独特の響きを発出させる。その音響と、複数のアナログ「オーバーヘッドプロジェクター」による映像が干渉し合って、何と云えばいいか、身についた「感性という牢獄」が崩されていく心地よさがあります。

「創造された私」となって思い浮かんだのは、空海の「五大に皆響き有り／十界に言語を具す」という言葉。「五大(地水火風空)」とは森羅万象(西欧では四大元素)、これら各々の響きが共振し合って創造エネルギーを沸騰させる。「五大皆有響」は、創世記冒頭の「地の混沌」や「深淵の闇」と同じ意味合いだと思います。十界云々はここでは省略。

当時だったらアンダーグラウンドや前衛とレッテル張りされてしまうでしょうが、今やそうした区分はほとんどないようです。昔の怪しい青年はそのまま怪しいオジサンになり、今日の青年たちは怪しいオジサンたちと楽しそうに語り合っていました。八ヶ岳伝道所がこうした響きに満たされたことは、ある種の啓示だったような気がします。

聖書を読むうえで、時には意味性や歴史性に惑わされずに、世にあまねく生きて存在する創造の響きを直截に感じる。そんな膨らみのある春の夕べでした。Ω